

た。

他方、対北方武力行使の決断は、八月十五日を目途としていたが、極東ソ連軍の西送は、予期に反して多く行われなかった。陸軍は、八月九日、対北方企画を断念した。

そのため、陸軍の関心は、勢い南方作戦準備、帝国国策遂行要領の研究、検討に移った。八月中旬以降の動員、編制等には、関特演に關係するものと、対南方を含んだことが相錯綜している（二面作戦、陸軍の主敵は北から南へと移り、しかも支那大陸の戦いは続行され、結局三方面の敵に対応しつつ敗戦と向かったのである）。

## 事故死を免れ生還

### 満州一二四自動車部隊

岡山県 村本 忍

今の備前市三石で料理旅館業を継いで私は三代目と

して、大正九年三月三十一日に生まれました。私は長男、第五人、妹一人、若いうちはいわゆる「極道者」で、父は「お国のために尽くすなら、死んでも一つも心配ない、兵隊に行け」というので、志願して兵隊に入りました。

大正九年生まれは、昭和十五年徴集ですから、十五年に入営なのですが、私は十三年徴集者と一緒に昭和十四年一月十日、姫路の第十師団輜重兵第十連隊で、初の自動車隊に入営しました。私は、長い剣を下げ、馬に乗るのかと思っていました。期待外れでした。

自動車のことなど何も知らぬので、大部隊られました。父が面会に来たとき、叩かれた瘤を見せたくないので帽子を深く被り、まともに父の顔を見ることができませんでした。

小沢中尉の当番になり、自動車学校へ派遣されました（世田谷の現在の農大の所です）。本来なら八カ月で教育を終えて帰るのを、教育係として残され、昭和十五年十一月に原隊復帰の予定でした。

ところが、部隊は満州の佳木斯<sup>じふじす</sup>へ満州第一二四部隊

として行っているので、二三人単独で帰隊せよということでした。私は実はビルマ要員として教育されていたというのです。東京にいる間は観兵式に二回、各連隊の軍旗新授式のための運転手をしていたので、二回ほど、正式に二重橋を渡りました。

その後、憲兵隊に自動車の運転を教育しました。憲兵は民間では教育できない。車の自動車運転者教育のため、関東各地の軍隊を出張して回りました。当時、私はまだ一等兵でしたから、教わる者は皆上級者か上官ですから、気を遣って教育しました。教育内容は野外訓練とか、分解した車の結合、組み立てて元通りにする。エンジンがかかった自動車を途中から運転するとか、途中でエンストすれば自分で修理する訓練とか、何しろ自動車は天皇から預かった兵器だから大切にしなければならぬ。人間は一銭五厘の葉書で召集できるが、自動車は大金だから、などと教育にあります。私たち三人は単独で佳木斯へ行くことになりました。下関・釜山・函館を通過、任地は北滿の三江省ですから、その間、銃と弾薬をもらい列車で民間人と共に乗っ

ていきました。内地では銃に白布を巻いていましたが、満州へ入ってからは白布をほどきました。新調の騎兵銃でした。佳木斯自動車隊では歩兵部隊の派遣とか、糧秣輸送、隊では戦車攻撃や地上に水を撒いて凍らせ、その上を運転する、水上運転などがあります。そのうちでも重点は戦車攻撃、爆雷を持って匍匐前進で、戦車のキャタピラの中へ爆雷（火薬）を突っ込むのです。任地に着いた時は十一月で、もう川も道路も凍り付いていました。冬となれば零下三〇度以上で、便所で手を洗って水をよく拭き取らないと、金属の取っ手に手が凍りつき、手の皮がむけてしまう。さながら吸盤に吸い付いたような感じがする。気を付けていたので凍傷にはなりませんでした。

佳木斯から次は興山鎮へ行く。ソ連国境の見える金山があり、そこを日本兵が守備している。そこが氷結（川が凍る）しなければ糧秣輸送ができない。冬でなければ行動できない。しかし、やじ棒という氷の柱ができて、それにぶつかるとタイヤが八の字になってしまい、ハンドルが切りにくくなる。そのため、黄色火

葉でやじ樺を爆破しながら川を渡るのです。

私が班長のとき、ジョイントがはずれたので車の下にもぐり、瞬間にジョイントが落ち車が下がっていくのを誘導していたが、岩があり、その上に誘いこんだ。そのため車は破壊されずに済みました。しかし、私は人事不省、気を失ってしまったのです。身を挺して陛下の兵器を守った私を、皆で宿舎に担ぎ運んでくれました。そして凍傷になりかけた体を、皆でマッサージをして凍傷をまぬがれたのです。一等症となったのですが、私は伏せたまま寝返りをすることもできません。その時の兵隊を今捜しているのですが、恐らくビルマ戦線へ行って生死を確かめることができず残念に思っております。

原隊復帰を、と努力したのですが、体の震えが止まらず内地送還となり、大連陸軍病院、大阪陸軍病院、姫路陸軍病院と転送それ、現役満期が十日ほど遅れて姫路陸軍病院から姫路の原隊へ帰りました。本来なら、内地で傷痍軍人でいればよかったのかもしれませんが、父は兵隊に入れたのだからと言ってくれたし、私もこ

の負傷がなければビルマ戦線へ行っていたかもしれませんが。

そのころ、大東亜戦争が始まり、私は役場へ勤めながら青年学校の教官をしていました。昭和十八年十二月二十八日召集がきました。白紙で「教育召集を命ずる」とありました。第二補充兵の教育のため姫路の輜重隊へ入りました。四カ月教育を終了したら、突然ミランダオへ行く予定の突兵団（第八十四師団）へ転属を命じられました。

突部隊は野砲隊の編成が遅れミランダオへは行けなかったのですが、その後は護路部隊となりました。突部隊は神戸、大阪空襲では活躍、その後富士裾野の陣地構築のため三島へ行きました（終戦時神奈川県小田原）。大阪空襲では、焼夷弾に倒れた死体の山の見た。衣服と共にくすぶる強烈な臭い。「戦争はむごい」ものだ。

そのころ、海上から艦砲射撃があったり、B29の空襲があったりで、その中を材木を運んだりしていました。

八月二十日零時まで、三島く厚木間の退去しない日本兵は捕虜とするという命令があり、我々の隊は自動車と列車で原隊姫路に帰りました。しかし、その間、飯が炊けないので乾パンと鮭の缶詰を食べ、兵隊全員にジンマシンが出ました。カルシウム注射液がなく、塩化ナトリウムをどんぶり鉢一杯を飲ませました。そのため原隊へ着くまで下痢がひどく、また便所が少なくて往生しました。しかし、原隊に帰って軍装を整えて兵隊たちを復員させることができました。

九月には残務整理者が残りました。一日も早く帰りたいが汽車は満員でした。役場に復帰しましたが、復員列車に人身事故があり、棺桶が足りず苦労しました。また備前市の峠では自動車が崖から落ち負傷者が続出する、伝染病は流行するで大童で休む暇もありませんでした。

私は役場で、今でいう厚生係をしていましたので、死者、負傷者の手当て、死体の埋葬までしました。死んだ人の名前を官報に出すので親族が引き取りに来る。引き取り不明者は棺が足りぬので死体をドングロスの

中に入れ仮埋葬してあるのを掘り返し、棺を作って入れ直したりもしました。

伝染病患者を収容する病棟はあってもそこは満員で、その処置など、復員後の私の体は前に申した負傷の後遺症もあるが、ガタガタでした。しかし、厚生係任務に追われ、腰は痛かったが体を何とか回復させることができました。

その後、会社勤めをし、五十六歳で現役を終わり、六十五歳まで働き、その後は恩給欠格者のお世話をしています。体は満州での負傷の後遺症はまだありますが、現認証明がない。軍隊手帳には一等症とあるが、傷痕傷病に対する措置はできません。

満州勤務中の自動車部隊では「よく兵器を守った」と褒められました。当時の部隊の人たちはビルマへ行ったのか音信は不通です。この負傷を証明する人はおりません。今ボランティアとして軍歴相談員をしていています。心臓病は負傷の後遺症と言われています。

しかし、若いころの不良青年、ヤンチャ坊主が、軍隊があつたために今日の人間を作ってもらい、今日に

至っているとつくづく思っています。軍隊が人間勉強の場で、人間らしい人間になれました。苦勞が立派な人間を作るのです。これから今の若い人も親を崇拜する人間になってもらいたい。

## 満州の邦人救出後、

### 無念の強制労働開始

愛知県 椎原芳郎

私が昭和十八年三月、初年兵として入隊した満州第九独立守備隊歩兵第三大隊第三中隊は、満州国西南部の熱河省省都承德市に司令部を置く三個大隊編成の旅団規模の部隊に属し、山海関に端を発する万里の長城を築いた北支那に接した地域の防衛、肅正作戦に従事していた。

当時の関東軍の中で唯一の実戦部隊で、相手は満州侵入を狙う毛沢東の共産八路軍であった。当然部隊は関東軍一番の精鋭部隊なりと意気も盛んであった。軍

服の襟についた「X」印のマークは鉄路を示すI（レール）を歩兵小銃を交差させて守る意味だった。このマークは全満の鉄道が無料乗車できる切符でもあった。

熱河省全域を三個大隊で守備するため十二個中隊のほとんどは禿げ山ばかりの岬々たる異容な山景の山の中の満人部落の隣に隊舎を設けていた。平地にある中隊はある程度の隊舎だったが、山中の中隊は臨時の隊舎が多く満人家屋を改造して使っていた。転々と移動するらしく私の中隊でも半年前にここ興隆県六撥子（リューボーズ）に来て一年後には別の土地に移動していた。だから戦友会で地名を言っても知っている人が少ない状態だ。

大隊本部は中隊とは異なってそれぞれの地域の中心になる小都市にあったから当然在留邦人が集まっていた。警察官は田舎に駐在していたが単身赴任が多く、家族は大隊本部駐屯の街に住んでいた。

昭和十九年八月、第九独立守備隊は第一〇八師団に改編された。三個大隊はそれぞれ歩兵連隊となり第三大隊は歩兵第二四〇連隊となり、第一大隊は興隆に、